

『コミュニティ・キャピタル論

－近江商人、温州企業、トヨタ、長期繁栄の秘密－』

西口敏宏・辻田素子 著

農業・農村領域 主任研究官 平林 光幸

本書は、中小企業論や組織間関係論等を専門とする研究者によるものです。古くから存在する企業の経済繁栄は、いかにして生まれ、なぜ現在まで長く維持されているのか。本書では、企業もコミュニティとして捉え、優れたパフォーマンスを示すコミュニティの特徴を明らかにしています。

さて本書のタイトルにある「コミュニティ・キャピタル」とは何でしょうか。筆者は、個々の人間に属するヒューマン・キャピタルと、広く社会一般に存在するソーシャル・キャピタルの中間に位置するものと定義しています。メンバーシップが厳格な特定コミュニティにおいて形成され、ある意味、排外的な関係資本であり、メンバー間によってのみ有効に利用されうる資本と説明されています。

このコミュニティ・キャピタルを具体的に説明するにあたって、キーワードとなるのが“刷り込み”、“同一尺度の信頼”、“準紐帯”という3つの概念です。著者によれば、よく機能するコミュニティのメンバーは、長年の成功体験の共有によって、コミュニティの内部者として埋め込まれ、一定のアイデンティティを見出し深化させているそうです。そして、メンバー同士で問題解決を図りながら、成功体験を積み重ねる中で、メンバーであれば信頼できるという“刷り込み”が行われ、これこそが集团的繁栄にとって不可欠なものであるとしています。また、優れたコミュニティでは、コミュニティ全体が危機に陥った場合に、メンバーが一致団結して、問題に対処する行動がしばしば見られます。こうした機能が働くかどうかは、メンバー間での成功体験に基づく相互信頼の浸透が重要であり、その信頼を“同一尺度の信頼”と定義します。さらに同じコミュニティへの帰属意識が強化されると、面識のないメンバー間でさえ、積極的に協力し合う“準紐帯”が醸成されるそうです。つまり、パフォーマンスの高いコミュニティは、メンバーへの成功体験の“刷り込み”によって“同一尺度の信頼”が派生し、面識のないメンバーでさえ協力しあう“準紐帯”が醸成されると指摘しています。

本書で取り上げられている事例のうち、ここでは中国・温州市の事例を紹介します。同市は地方港湾都市で、最貧地域の1つでしたが、1978年の改革開放以後、外国からの直接投資に依存せず、地元民間資本に牽引されて、靴や眼鏡等の日用消費財の世界的産地として経済発展を遂げた地域です。

経済発展初期は、外国へ出稼ぎする温州出身者（離郷者）が各地でビジネスチャンスを発見し、家族や親友らと商売を進めた結果、温州地域内で小規模な家内工業が急増し、さらにその製品を販売する行商人や専門市場が台頭しました。彼らのビジネスは、早期には限られた範囲の人々に依拠したものでしたが、成功と資源分配を通じて、「同一尺度の信頼」が分出し、次第にコミュニティ全体に広まりました。また、国内外の離郷者数とその活動範囲が広まる中で、同郷人であればとりあえず信用し、お互いに情報等を共有しあう「準紐帯」が見られるようになったそうです。つまり温州市の経済発展にはコミュニティ・キャピタルの醸成が強く働いているのです。こうして経済発展を遂げた温州市ですが、2011年には経済危機に見舞われます。直接的な原因は様々でしょうが、著者は血縁や同郷縁をベースにした排外的なコミュニティの限界によるものと見ています。同郷人以外の人々とも信頼関係を育み、彼らとの相互扶助や相互補完が可能なコミュニティの形成が彼らに必要なだったのです。つまり経済発展のベースにはコミュニティ・キャピタルがあり、それを継続的なものとするためには、排外的なコミュニティではなく、開かれたものでなくてはならず、より普遍性の高い新たなコミュニティの模索が必要なのです。

こうした考え方は、農村にも当てはまるものでないでしょうか。集落営農、六次産業化、農泊…。本書には農村振興のヒントが詰まっています。



『コミュニティ・キャピタル論－近江商人、温州企業、トヨタ、長期繁栄の秘密－』
著者／西口敏宏・辻田素子
出版年／2017年
発行所／光文社新書